Go Down, Moses のむかしがたりのアイロニィ：“Was” を読む

佐々木　裕　美

はじめに

Go Down, Moses (1942) は、フォークナーの創作の一つの転換点として問題の作品とされている。それには、主に次の二つの理由があると考えられる。第一に、この作品の出版後、*Intruder in the Dust* (1948) までの6年間、いくつかの短編のほかには何一つ新しい作品を発表していないこと。第二に、これ以降発表される作品のすべてが、Yoknapatawpha County「再訪」ともいうべき作品であって、テーマとして新しいものを提示せずいわゆる “The Great Years” 当時の作品にみられた迫力に欠けるというものである。第一の理由については、作家を取り巻く当時の社会的・個人的状況[1]によるものであることがあげられるが、いまここで問題にしたいのは、第二の理由についてでである。この点について、Daniel Hoffman は、次のように述べている。

> As a white Southerner, as a man of deep Christian faith, Faulkner felt that the guilt his region had to bear is the maltreatment during slavery and since of his black neighbors and kinsmen. His novels embody the anguish of his conscience, the complexity of the problem, and are at once unremitting in their honesty and triumphant in their literary fulfillment.
>
> After *Go Down, Moses*, Faulkner continued his exploration of these problems, but with a considerable lessening of intensity. Each of his remaining books is a sort of sequel to one or more of the earlier ones....
>
> ...
>
> In these late works Faulkner is revisiting Yoknapatawpha County. That territory he had already deeply explored and thoroughly surveyed ; there are few discoveries left to be made. (Hoffman, 172-73)

確かに、*Go Down, Moses* までにフォークナーは Yoknapatawpha の土地柄やそこに住む人々について、ある程度語りつくしており、そのため、この作品までに、創作のための素材、乃至は作家の天才が尽きたと言われる所以なのかも知れない。しかし、その一方で、作者はひとつの違った試みを始めている。それは、この作品を境に、土地や人にまつわる民話を再構成して、語り始めているということである。

皆河宗一氏は、様々なアメリカ人作家を例にあげて、その作品とフォークロアとのつながりを示唆しているが、フォークナーについては、次のように述べている。

> …フォークナーは、ヨクナパトウファ郡という架空の土地を創造し、その地点から南部

の過去を凝視しつづけた作家である。過去を凝視する作家であるならば、フォークロアとか民話とかを無視しないのは当然のことである。(皆河, 39)

さらに、昔話研究の第一人者である小澤俊夫氏（国際口承文芸学会副会長）は、民話について次のように述べている。民話は、ただ教訓をたれ、道徳を教えるだけでなく、「もっと広い人間観や世界観、自然観の滲みこんだ大きな世界」(小澤, 4）である。民話は、長い年月をかけて人々の口を通して伝えられ、話され、「人間の世界を全体として映しだしてみせているのであって、けっして、一部分だけをとりあげて」いるのでもなく、「またひとつの物差しではかろうとしているのでも」(小澤, 202) ない。不道徳な話は、どこの地域にも数々みられるが、それは、民話が「人に道徳を教えようとするためにあるのではなくて、人に、人生とはこういうものだよ、と教えてみせるためのもの」(小澤, 214) だからなのである。

そこで、本論では、ヨクナパトーファという南部の歴史を持つ架空の土地を創造したフォークナーが、そこに住まう人々の間に必然的に自然に発生するはずの民話を語ることによって、ヨクナパトーファ・サーガをさらに補完するために、フォークロアを語り始めた、という観点から *Go Down, Moses* をみてみたい。その一方法として、この小説の prelude となっている "Was" を読んで、フォークナーのむかしがたりの意味を探りたい。

I. "Was", a Classic Comedy of the Frontier

"Was" を南部フロンティアの classic comedy とする Lewis Dabney の見方に同調して Hoffman は、フォークナーが、"Uncle Adam's Cow" という民話を下敷きにしてヨクナパトウファ郡のものがたりに変えたのだとしている。[2] フォークナーが何を下敷きにしたかについては、ここではさほど重要な議論ではないが、民話の語りの特徴を述べるために、この話について少し触れておきたい。そのストーリィはおおむね次のようなものである。

> あるとき、あるところに、二人の男が住んでいた。一人は女房持ちの Uncle Adam、もう一人は雌牛を 2 頭持っている独り者の Uncle Dick といった。二人はそれまでも色々なものを交換して生活していたが、ついに Uncle Adam の女房と Uncle Dick の雌牛 1 頭とを交換してしまった。女房を牛に変えてしまった Uncle Adam が保安官に咎められて、大笑いしながらこう言い返した。"Don't you believe it, Sheriff, don't you believe it. Why, that cow of mine is three-fourths Jersey!" (Randolph, 42) と。

この話にもはっきりと表われているが、民話の語りの形式には、2 つの特徴がある。第一は who, where, when（しかもこの when は、最近よりもずっと前であること）を語り始めに曖昧かつ簡潔に知らせることである。この話では、最初のセンテンス[3]でこれを伝えている。同様に、"Was" の書きだしもこれにのっとった形式をふんでいる。もうひとつの特徴は、Yeats の定義でも知られている、モラルの欠如である。民話に大事なのは、誰がどうしたということよりも、何が起こってどうなった、というプロットである、従って、当時は頻繁に行われていたバーター取り引きが、女房と牛の交換に及んだ、という民話のストーリィだけを取り上げて、男尊女卑だの残酷だのと議論することはある意味でナンセンスなことだといえる。大事なことは、なぜその

社会でそういう民話が語られ続けてきたのか、歴史的にみて、その背後にあるものをどう読み取るのか、なのである。

"Uncle Adam's Cow" の笑いの背後には、フロンティアに生きる二人の男の苦境が隠されている。おそらく、Uncle Adam は、1頭の牛も持てず、窮乏のなか、女房を養うことができない状況に陥っていたのであろうし、Uncle Dick は、雌牛を2頭も持ち、食べることには困っていなかったが、家族を持ちたくても持てなかったのであろう。この話が共感を呼んで語り継がれたのは、こうして困苦欠乏を笑いとばすことで、それを乗り越え、生きる力を奮い立たせねばならなかった、辺境地に生きる男達のぎりぎりの生き様があったからである。

Ⅱ. Comic Elements in "Was"

ついで、"Was" の喜劇的要素について考えてみたい。"Was" のストーリィは、おおむね次のようなものである。

> McCaslin 家の双子、Uncle Buck と Uncle Buddy の家の中で、犬が狐を追い回すどたばたから、この話は始まる。この狐は、彼等が狐狩りを楽しむために飼っている狐である。そして今、Uncle Buck は、9才の Cass とともに、何マイルも離れた隣の農園へ出かけなければならない。黒人の Tomey's Turl が、隣の Beauchamp 農園のガールフレンドの Tennie に会いに行くために、農園を逃げ出したからである。黒人奴隷を所有することに極めて消極的なこの双子にとって、問題は、Tomey's Turl というひとりの黒人を失うことではなく、それによっておこる騒動にある。すなわち、この双子と同じように強い独身願望を持つ隣の農園主、Hubert Beauchamp は、なんとかして同居の妹、Miss Sophonsiba を Buck に嫁がせることで、正真正銘の独身になりたいと心から願っており、妹の Miss Sophonsiba 自身も、Buck との結婚を望んでいる。したがって、折あれば、彼等は McCaslin 農園へやってきて長期にわたって滞在し、Miss Sophonsiba が Buck と結婚するための既成事実をつくる機会を狙っているのである。Tomey's Turl の逃亡は、Beauchamp 兄妹にとって、McCaslin 農園を訪れるまたとない機会であり、一方、双子にとっては、なんとしても阻止せねばならない事態である。Buck は、Turl が Beauchamp 農園に行き着く前に、なんとかして彼をつかまえなければならない。
>
> しかし、Tomey's Turl は、Miss Sophonsiba の手引きによって、まんまと Beauchamp 農園に逃げ込み、Buck と Cass は、そこで一晩を過ごすことになってしまう。Buck は、不覚にも、Miss Sophonsiba と Tomey's Turl の共謀したワナに落ち、独身女性のいるはずのない部屋のベッドに入った途端、Miss Sophonsiba その人の悲鳴を聞くことになるのである。
>
> 妹との結婚を迫る Hubert Beauchamp に対して、Buck はこの事態のそもそもの発端は、"... I'll bet you five hundred dollars that all you got to do to catch that nigger is to walk up to Tennie's cabin after dark and call him...." (15)[4] と言った Hubert のことばであり、もしその通りであったならば、ここで夜を過ごす必要もなかったのだと言い張る。そして結論は、ポーカーゲームに委ねられることになる。
>
> この勝負に負けた方が Miss Sophonsiba を引き受け、相手の農園の黒人を300ドル支払っ

て買うことになる。負けるのはBuckで、彼はすべてをBuddyに託して身を隠してしまう。Cassの報告を受けてBeauchamp農園にやってきたBuddyは、Hubertにとってより良い条件、即ち「Hubertが勝てば、BuckはMiss Sophonsibaと結婚するばかりでなく、持参金なしで彼女を引き受けよう」という条件でポーカーゲームをすることになる。

結果的には、トランプの勝負は 、途中でHubertがおりることにより、決着がつかず、双子はTennieとTomey's Turlの二人の黒人の恋人同士を連れてMcCaslin農園に帰る。トランプのカードを配るTomey's Turlの「白い」手を見て、Hubertが負けを直感するからである。

これらの話は、9歳の男の子の目を通して見た出来事を、その子が大きくなってから16歳年下のIke McCaslinに語った話を、後にアイクが語ったものである。誰もその場にいたわけではなく、昔あった話として語り継がれてきた一つの民話であり、世の中の悪をまだ十分には知らないナイーヴな少年が見たできごととして語られるために、醜悪な部分や罪深い部分は表面に出ず、コミックなトーンで面白おかしい事件として黒人とMiss Sophonsibaをめぐる白人農園主どうしの駆け引きが語られている。

しかし、この駆け引きは、単に双子とHubertの間の男同士のゲームではない。社会的立場の弱い、黒人たちと南部女性Miss Sophonsibaは、賭けの商品にされるという屈辱をうけながらも、したたかにこの賭けに参加し、しかも、結果的には求めていた戦利品をたっぷり獲得しているのである。即ち、Tomey's TurlとTennieは、一緒になってMcCaslin農園への帰路につき、Miss Sophonsibaは、いずれBuckと結婚してIke McCaslinの母親となる。

Ⅲ. Characters of "Was"

このように、"Was"では、3種類の人物ー南部白人男性・南部白人女性・そして黒人ーが登場する。また、'fox hunting' をモチーフにしてこの話は進められるが、'fox' が、あるときは文字どおり狐を指し、あるときはUncle Buckに追いかけられる逃亡奴隷Tomey's Turlを指し、そしてまたあるときはMiss Sophonsibaに、彼女の結婚相手として狙われたUncle Buckを指すことになる。

この3種類の人々を、黒人・女性・白人男性の順に、もう少しくわしくみてみたい。

Ⅲ.－1　Tomey's Turl : a black-male character

まず、この話の鍵を握っているのは、逃亡奴隷のTomey's Turlである。彼の出自については、あとに続く物語において明らかになっていくが、"Was"においても、すでにいくつかの暗示[5]が示されている。彼は、最初のMcCaslinであるCarothers McCaslinの子供であると同時に孫でもあるのだ。つまり、Carothers McCaslinは、黒人の女Euniceとの間に娘Tomasinaをもうけ、さらに実の娘であるそのTomasinaを犯して息子、Tomey's Turlをもうけたのである。従って、Tomey's Turlは、その血の4分の3をCarothers McCaslinその人から受け継ぐ混血であり、従って、どのMcCaslinよりも濃く、McCaslinの血を受け継いでいることになる。

屋敷の中の様子を覗き見しながら、彼は9歳のCassに自信を持って次のように言う。

" .... I got protection now. All I needs to do is to keep Old Buck from ketching me unto I gets the word."

" What word?" he [Cass] said. " Word from who? Is Mr Hubert going to buy you from Uncle Buck?"

" Huh," Tomey's Turl said again. " I got more protection than whut Mr Hubert got even." He rose to his feet. " I gonter tell you something to remember : anytime you wants to git something done, from hoeing out a crop to getting married, just get the womenfolks to working at it. Then all you needs to do is set down and wait. You member that." (13)

こうして、Tomey's Turl は、McCaslin の双子と Hubert Beauchamp という白人の農園主をまきこんで、大騒動を起こし、ポーカーのディーラーとして Buck を苦境から救いだして、最終的には誰にも損をさせずにガールフレンドの Tennie を手に入れる。

Ⅲ.－2　Miss Sophonsiba : a white-female character

ここで Tomey's Turl が待っているのは、他ならぬ Miss Sophonsiba からの "word" である。この話に登場する唯一の南部女性が、Miss Sophonsiba である。ヴァージニアの大農園とは異なり、貴族的な要素の乏しいミシシッピの農園で、彼女は真の Southern belle でありたい、そして Buck McCaslin を夫として得たいと、心から願っている。誇り高い南部女性として、彼女は由緒正しい家柄であることを示すために、Beauchamp 農園を Warwick という名前で呼ぶ。

. . . Mr Hubert Beauchamp's place just over the edge of the next country, that Mr Hubert's sister, Miss Sophonsiba ... was still trying to make people call Warwick after the place in England that she said Mr Hubert was probably the true earl of only he never even had enough pride, not to mention energy, to take the trouble to establish his just rights. (5)

そして、人々がその名前を呼ぶまでは、何の話をしているのか分からないといったとぼけ顔をするほど家柄と血筋に固執し、誇りをもっている。

. . . until when they wouldn't call it Warwick she wouldn't even seem to know what they were talking about.... (9)

兄の思惑と Buck の迷惑をよそに、彼女は彼女なりに、あくまで南部女性にふさわしいやりかたで Buck を手に入れるべく惜しみない努力をするのである。

Ⅲ.－3　Buck, Buddy and Mr. Hubert : white-male characters

一方、60歳を過ぎても独身の Buck と Buddy の双子と、やはり強い独身願望を持ち、一刻も早

く妹を嫁がせることに余念のない Mr. Hubert には、南部白人男性として、paternalism に固執しながら、その実、そのもともとの意味であるはずの、「父であり夫である」責任からなんとか逃れようとする、いかにも情けない姿が認められる。

社会的立場では一番強いはずの白人男性たちは、この騒動の結果、何も損をしないかわりに、何も手にすることもできなかった。それどころか、彼等が実際の生活において、事態を動かすという点ではまったく無力であったということを滑稽にも暴露してしまう。南部貴族として、paternalism を身につけた彼等は、南部白人であるがゆえに、ある意味で自由を奪われているといえる。彼等は、南部白人男性の obligation という手枷足枷に縛られて、自らの思いとは裏腹に、黒人たちを管理し、丁重に女性を扱い、トランプの勝負に自分の運命を賭けてしまうのである。つまり、彼等は、南部男性社会の *noblésse oblige* という pretensions to nobility に翻弄されて、南部貴族としての面目と世間体を保つために、そのコミカルな役割を演じているに過ぎない。

Ⅳ. Pretensions in "Was"

中編 "The Bear" において Ike McCaslin が帳簿を読み解いていくあの長いことで有名な one sentence において語られるように、黒人たちは、双子から解放を提示されても「自由になりたくない」「ここに留まる」と言って、従順な奴隷の身を演じ、その実、重労働をせずして養ってもらい、しかも一定の枠内であるとはいえ、自由を得ている。その意味で、黒人たちは「不自由な奴隷」を pretend しているに過ぎない。しかし、何の得るところもない白人たちの pretension に比べ、黒人達の pretension は、結果を見据え、計算されたしたたかな pretension である。

そして、Miss Sophonsiba は、誇り高い南部女性として、また、賭けの商品にされても男性への従順を装い、彼等に好きかってをさせて弱い女性の立場を演出しながら、現実には自分が結婚するにふさわしいと考えている相手、Buck McCaslin を手に入れるために権謀術数を使って、利害の一致する黒人 Tomey's Turl を利用し、"Was" では実現しないものの、最後には夫として Buck を獲得する。

このように "Was" では、黒人たちや Miss Sophonsiba など白人女性は、社会的弱者としての自分達を演出し、自分達ばかりでなく、白人男性の自負をも利用することによって、生活の実権を握っている。一方、社会的に最も優位に立っていると思われる白人男性は、その absurd and obsessive pretension のために、損をしたり、惨めな思いをするという、black irony がある。

おわりに

フォークナーが、黒人や女性が受ける虐待ともいえる事件やことがらを書くとき、その部分だけを今の我々の尺度によって批判するのは危険だといえる。そこには、世の中を見据える痛烈なアイロニィが存在しているからである。"nobility" と "authority" を装うことによって、南部男性は、黒人と女性の自由のみならず、自分たちの自由まで制限させられる。南部貴族として paternalistic に振舞うことを要求されるからである。一方女性と黒人は、そういう白人男性の求める枠の中におさまっているふりをしてさえいれば、穏便にものごとは進み、かつ主導権を手に入れることができるのである。

さらに、ここで注目されることは、7編の中短編で構成されている *Go Down, Moses* が、一つのノヴェルとして新しい語り手を得て、黒人の視点から南部の物語を語らせていることである。フォークナーがこの作品を意図した頃には、Quentin や Bayard のような従来の語り手を予定していたが、次第にその視座を黒人にも白人にもくみしない neutral で最も自然に近い Ike McCaslin に移して、Buck, Buddy, Mr Hubert などで代表される、白人系男性を、黒人系男性の視座からとらえたことには大きな意味がある。従来の黒人トリックスター Sambo への視線が、次第に男性白人に移っていき、先に紹介した "Uncle Adam's Cow" の民話の題材にもなる人間悲哀を Tomey's Turl のような民話的人物によって描いて、黒人神話を作り出しているからである。これまでも扱ってきた incest や miscegenation についても、作者が白人の側からだけではなく黒人の側からの視点を取り入れたことは注目に価する。

このようにして、小説 *Go Down, Moses* においては、フォークナーの共感と視点とは、黒人の側にあるといえる。"Was" において作者は、白人男性から黒人男性へと視座を移すことによって、白人男性を黒人民話のトリックスター化し、社会的強者であるはずの彼等の弱さを面白おかしく暴露している。その意味で、"Was" は、これに続いて深刻さを増していく6つの物語 —— 黒人女性の社会的意義をアイロニカルに逆転する物語 —— の序章として、成功を収めているといえる。

白人男性の、あるいは白人社会の、表面的な強さの裏にある弱さ脆さを浮き彫りにしながら、黒人女性の真の強さ、黒人男女の愛情の深さ、ひいては彼等の純美な人間性を歌い上げていくこの小説は、確かに、フォークナーが幼少時の Mammy, Caroline Barr に献じるにふさわしいものであったといえる。その最初の物語として、ここにとりあげた "Was" は大きな役割を果たしており、この作品に従来与えられてきたよりも高い評価を受けるに価するといえるのではないだろうか。

＊本稿は日本英文学会第49回中部支部大会（1997年10月11日　中京大学）での口頭発表に基づく。

注

1 この時期、大恐慌の余波がまだ南部には残っていたこと、第二次世界大戦を迎え彼の芸術を理解する余裕が社会になかったこと、さらには家長として親類縁者の生活を維持するために、財政的にかなりの負担を強いられていたこと、そのために、Hollywood で脚本家として日銭を稼ぐ仕事をしていたこと、agent とのトラブル、映画会社との著作権の問題、家庭内の Estelle との不和などが、あげられる。

2 Hoffman, 111.

3 "One time there was two old men that lived up Magnetic Holler, right close to a little branch they call Mystic Spring nowadays." Randolph, 42.

4 以下、Faulkner, *Go Down, Moses* に言及する場合には、括弧内に頁数のみを記す。

5 "that damn white half-McCaslin" (6)、"saddle-colored hand" (27)、"Tomey's Turl's arms that were supposed to be black but were not quite white" (29) などがその例である。

引用文献

Dabney, Lewis. "'Was' : Faulkner's Classic Comedy of the Frontier," *Southern Review*, n.s., Ⅷ, 1972. 736-748.

Faulkner, William. *Go Down, Moses*. 1942. New York : Vintage, 1973.

Hoffman, Daniel. *Faulkner's Country Matters - Folklore and Fable in Yoknapatawpha*, Baton Rouge : Louisiana State UP, 1989.

Randolph, Vance. *Who Blowed Up the Church House? and Other Ozark Folktales*, New York, 1952. 42-43.

皆河　宗一.『アメリカ民話の世界』. 民俗民芸双書, 岩崎美術社. 1977.